

毛 受 遺 跡

調査の経過 毛受遺跡は、一宮市大和町毛受到に所在する。本遺跡は、尾張平野の北部をやや蛇行しながら南流する日光川の上流域に形成された標高7 m前後の自然堤防上に分布する。

今回の調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施しており、本年度は西尾張中央道の西側にA a・A b・A cの3つの調査区、合わせて1,446㎡を発掘調査した。調査期間は4月～6月である。 (黒田哲生)

調査の概要 A a区では、調査区の北西隅で、東西方向にほぼ一定の間隔を保って並ぶ数条の溝を検出した。これらの溝の規模は、確認できたところでは、いずれも幅30～50cm、深さ10cm前後である。その配列状況から畝状遺構と考えられる。その他にも溝、土坑を検出したが、顕著な遺構ではなかった。出土遺物には内耳鍋などの土師器・灰釉系陶器・播鉢・天目茶碗等があり、ほとんどが鎌倉・室町時代の遺物である。これらの多くは小片で、遺構から出土したものも含めて、出土量は全体的に少なかった。

なお出土遺物の状況についてはA b区、A c区ともA a区とほぼ同様であった。

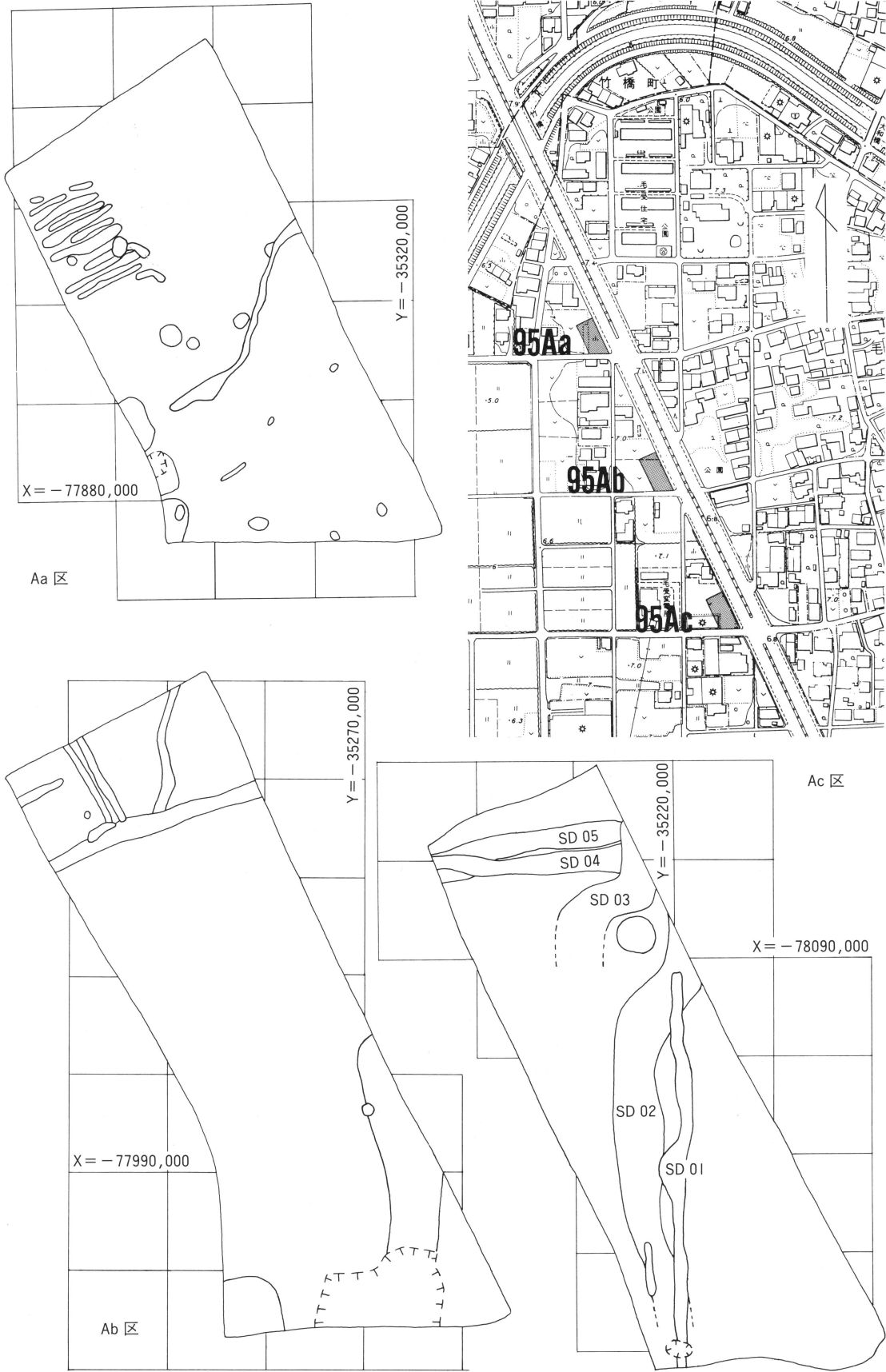
A b区では、南北あるいは東西方向の溝数条、土坑数基を検出したが、調査区全体の遺構は希薄であった。特筆すべき遺物として、この時期に使用されたと思われる宋銭（祥符元寶・元符通寶）2枚、加工円板3点が出土した。

A c区では、南北方向の溝3条（S D01・02・03）、東西方向の溝2条（S D04・05）、土坑1基を検出した。S D02・03はほぼ並行した位置にあったと思われ、また調査区の東端ではクランク状に屈曲していた。しかしS D03は途中から攪乱による削平をうけており、詳細を確認することはできなかった。S D04・05はこれらの溝に切られていた。これらの溝の性格は不明である。特筆すべき遺物として、墨書陶器1点・陶丸1点・加工円板3点が出土した。

まとめ 毛受遺跡は、『寛文村々覚書』などの文献に記述が見られる「毛受城」が存在した地点と考えられている。しかし、A c区で検出した数条の溝が「毛受城」にかかわる遺構である可能性を除けば、全体としては遺構は希薄で、遺構から出土する遺物の量も少なかった。またA b・A c区で、現在の毛受の集落が立地している自然堤防が西へ緩やかに傾斜をしていく様子が確認できたことも、調査の成果を考える上での参考になるであろう。

これらのことから、今回の調査地点は毛受遺跡の西端付近に当たると思われ、この遺跡の中心は現在の西尾張中央道よりも東側に展開していると考えられる。

(山本寿徳・飴谷 一)



調査区位置図（1：5000）およびAa～Ac区遺構配置図（1：300）